

ヘーゲルの『法哲学』 —— その成立の背景 (12) : 外編 3 :

「カントのライプニッツ哲学批判」

下城 一

Eine Untersuchung der Rechtsphilosophie Hegels ——

Über die Hintergründe des Zustandekommen der Rechtsphilosophie Hegels(12):

Anhang : Kants Kritik der Philosophie Leibnizs.

Hajime Shimojo

既に見た通り、1801年その哲学を展開し始めるにあたりヘーゲルは、教授資格申請論文『惑星軌道論』をイェーナ大学に提出した。現在の科学的評価からすれば、時代遅れとして顧みられない『惑星軌道論』がしかし、当時の学的状況からは十分に水準を満たすと判断され受理された。その当時の学的状況についてこそ、十分な理解が必要である。同じことは、ニュートン力学の基礎づけを標榜するカント批判哲学が、先行するライプニッツ哲学を前科学的な時代遅れの独断論的形而上学として批判し棄却したとするこれまでの通説にも妥当する。前々稿で示した通り、カントのデヴュー作『活力測定考』は、ライプニッツの「形而上学」に遡って改鑄された、ニュートン力学とは別種の「力学」観を十二分に駆使し、その意義を自身の独自の形而上学的存在論にまで拡張して、それによってニュートン力学＝デカルト的近代自然科学的世界観・力学観の決定的な存在論的不足を補おうとする、独自の「力学」的世界観 —— 後の「動力学」的世界観（『自然哲学の形而上学的原理』（1786）） —— を定礎するものであった。その哲学的企図が、ライプニッツ哲学そのものを受け継ぐ、革新的のものであることは、前稿で確認した通りである。

本稿は、それを踏まえてカントが、当面する自身の哲学的主題から何故 —— 時代の趨勢であるニュートン力学ではなく —— ライプニッツの力学観・世界観を選択するに至ったか、そうした選択がありえた理由は何だったのか。言い換えれば、ライプニッツ的世界観を踏まえつつも、それに修正を加え改善していかなければならなかった理由は奈辺にあったのか。要するに、批判哲学構想に至るカントの哲学構想は、何を問題とし、主題とするところから生まれたものだったのか、その一連の事情を、所謂前批判期の著作群を辿りながら改めて確認し直すことを主題とする。それらを踏まえながら、更にその主題を引き受け直し、再検討しながら構想されたのがヘーゲルの弁証法哲学であると考えられるからである。

先回りしていえばカントが、デカルト・ニュートン的な「外力」 —— 「現象」としての、「変化」としての「運動」 —— のみを取り扱う近代力学・近代自然科学的世界観を、ライプニッツ同様、存在論的に不足であるとみて、その「原因」を「現象」以前の領域に、因果論的に拡張して数学的に想定する「形而上学」を含む「力学」を構想したことは、前々稿で子細に検討した通りである。カントは、ニュートン力学的な「力」の概念の存在論的不足を「形而上学的」に補うべく、ライプニッツの「力」の概念の意義を形而上学の方に整理し直し、「運動」と「静止」を等価とみる「現象」観から「存在」概念それ自体を改鑄して、「物質」の「存在」それ自体を —— 「運動」として —— その起点において可能にする「内在力」の概念を、連続律的矛盾を抱える「延長」概念に替えて、「延長」以前の、「物質」の本質と規定した。それを基にカントは、「内在力」を物質の「抵抗力」「慣性抵抗」として、「斥力」の概念と等価とし、ニュートン的な「作用-反作用」の概

念に重ねてその「引力・斥力」系として、いわゆる「外力」とも連続的一元的な、包括的關係性の構築に進む。のみならず「物質」の「本質」としての「力」「内在力」の概念を、存在するもの全般を媒介する「作用力」と規定し直して —— ライプニッツ「予定調和説」では必要なかった「心身」の關係性を含め —— 改めて「物質」と「意識」の關係性を含めた「存在するもの」全般の媒介關係を定義し直し、それを「物理的影響」説として再定礎する、後の「動力学」的な世界体系の構想に至る。ライプニッツが「モナドは表象を持つ」とのみ規定するにとどまった「心身」の關係性を、「物質」と「意識」の「作用」關係に立脚し直して、「物理的影響」説として再定義するのである。

「心」をも扱い得る一元論的・連続的「力」の概念に立脚し直しながらカントは、当時最新のクヌッツェンやクルージウスのヴォルフ哲学批判も摂取しつつ、ライプニッツ哲学・形而上学の世界観のブラッシュアップに邁進していた、というのが前批判期におけるカントの哲学の実際である。最新の哲学的展開によって、ライプニッツ的世界観・予定調和説を、その構図は維持しつつ、それに代わる独自の「心身」關係論も含めた「物理的影響」説によって根本から批判的に書き変えて見せる —— 無論、その「物理的」の意味はデカルト・ニュートンのな自然科学的・古典力学的なもの（ヴォルフの物理的実体論）とは全く異なる —— それがカント「前批判期」の哲学の実相である。その延長上に、より「経験」的に科学的な最新の知見に寄り添う結果新たに出来ることになった経験的誤謬の問題、主観と客観の關係性を巡る真理論上のアポリアの打開を企図した批判哲学構想が浮上する。本稿は、そうした解釈の可能性を明らかにする試論である。

1. 常識的「力」の概念の問題構制：『活力測定考』再考

カントのデヴュー作『活力測定考』については、既に前々項で、冒頭から逐次、その主張の独自性について、それがデカルト・ニュートンのな、即ち近代自然科学・現代物理学に繋がる力学観 —— 「外力」すなわち「変化」としての「現象」を発端とし、「延長」を本質とした「物体」の位置の変化を「運動」とする原子論的な局所的力学 —— とは異質の、ライプニッツ的な、「形而上学」的「内在力」から出発するものであり、「微分小」概念に基づいて、「運動」と「静止」を等価な存在様態と見て、それらに共通な原因、すなわち「運動」としての「存在」一般の原因として、「延長」に先行する本質である「力」の概念を措定する独自の力学観であることを明らかにしておいた¹。

ここでは改めて、今一度『活力測定考』冒頭に立ち戻り、カントがデカルト・ニュートンのな力学に対しより形而上学的なライプニッツ的な力学観を選択し、その更なる展開を目指したのはどんな世界観的な見通しがあったのか、ライプニッツ的な力学観の選択の理由とそのことによる、そこから拓がり得る理論的的光芒の射程を明らかにしておきたい。

改めて確認しておけば、カントは『活力測定考』第一章第一節冒頭を「物体の力一般に関するいくつかの形而上学的概念をまずあらかじめ確定しておけば」と書き出していた（第一節：「どんな物体も本質的力を持つ」 I 17.）。この場合の「形而上学的」とは、文字通り「メタ・フィジック」 —— すなわち「現象」として、感官に顕在化する以前の —— という意味であり、本来、「力」

の概念について考えるには、「感覚の教えるところのもの以上」のレベルで考えなければならない、というのがカントの主張である。目に見える現象、すなわち「運動」をその顕在化とし、「原因」としての「力」の「存在」を措定してきた——「感覚の教えるところのもの以上」を出ない、つまり「形而上学的」に考えない——常識的な「力」の概念では、何が問題であり、何が見誤られてきたのか、先ずその点から確認し直す。

問題は、目に見える「現象」としての「運動」からだけ、原因としての「力」の存在を考えてきた常識の逆算的思考法である。「抵抗に勝ち、バネを押し縮め、質量を移動させる」「力」、そうした目に見える「作用」、外部から伝えられた「運動」「外力」の現象だけから常識は、その原因としての「力」——「力」の存在、即ち「力」の概念——を考えてきた (ibid.)。だから「静止」する物体は、「力を持たない」と考えられてきたのである。しかし、「物体は、無限に小さな抵抗しか受けておらず、したがってほとんどまったく作用していない場合に、もっとも多く運動している」とカントは言う (第三節:「その本質的な力は、正しくは作用力 *vis activa* と名付けられるべきである」)。

「力」を「運動」の原因としてのみ、現象から逆算して考える常識の思考法は、冷暖の原因を考察して、そっくりそのままそれを潜勢態に置き直して存在すると考えたスコラの思考法と同じで、それでは本来の原因の在り様を、それ自体の側から考えてみたことには少しもならない (I 18)。「運動」の原因を、如何にもそうした常識的な逆算的思考によって「運動力」と呼んできた従来の誤謬を脱して、哲学史上初めて、それ自体の在り様の側から考え直したのは——唯一アリストテレスの「エネルゲイア・エンテレケイア」概念を除けば——ライプニッツである (I 17)。ライプニッツが、それを「作用力 *vis activa* ²」というより一般的な名称に改めた。その「作用」の概念についてライプニッツは、「運動」状態におけるのみならず「静止」状態も含めて——すなわち「存在」様態の全般、つまり「存在」それ自体の——その原因としての「力」の概念を正規に問題にした。それを「死力」・「活力」の関係として——「微分小」概念を媒介に一元的に——考えようとしたのがライプニッツの「活力」論であったことは、前稿で、ライプニッツ自身の力学観に遡って、確認しておいたところである³。そのライプニッツに倣ってカントは繰り返す。「物体には延長に先立って本質的な力が宿る」。「延長以外に、いやむしろ延長に先立っている何ものかが存在する」 (ibid.)。

故に、初めてライプニッツが「作用力」と改名して現象以前の側から問いなおした (第二節:「物体のこの力をライプニッツは一般に作用力と名付けた」 I 18)「力」の概念を巡るカントの以下の考察は、顕在化した「運動」としての「力」——デカルト・ニュートン的な「外力」としての力学的現象——にとどまらない、それも含んで「感覚が教えるところのもの以上」の、「運動」として顕在化する以前の様態における「力」のあり様に遡って問題にする——「形而上学的な——「力学」的考察として読まれなければならないことを、先ずは十二分に銘記し直しておかねばならない——のちに『自然哲学の形而上学的原理』(1786)で改めて「動力学」として、「力学」とは区別して主題化されるにもものにそれはあたる⁴。問題は、その「形而上学的次元」に対する、カントの考察態度である。

翻って考えれば、そもそも「運動」だけが「力」の「結果」、顕在化であるとする、「運動力」の

概念、「運動」の「原因」を「力」の潜在に求める「原因力」という因果論的な常識的思考には、最初から概念上の矛盾が孕まれている。「力」が「作用」したと知れるのは、結果としての「運動」が生じた後であるが、その時、もはやそこには「運動」だけが存在し、「力」は消失して存在しないからである —— アリストテレスが考えてみせたように、「エネルゲイア（潜勢態）」である「力」は、それが「運動」として顕在（「エンテレケイア（実現態）」）化してしまえば、もはや「エネルゲイア」としての「力」は存在しない⁵ —— 。カントが、「運動とは、実際に作用してはいないがまさに作用しようとしている際の、物体の状態の外的現象でしかない」として、「運動」と「作用」を切り離して、本来無関係のものとして語っているのは（I 18）、「力」の「現象」のその実相 —— 「原因」としての「力」とその「結果」とされる「運動」の概念規定の本来の理論的不連続性 —— をカントが正確に理解しているからである。にもかかわらず、「運動」だけを「作用」の「結果」とする常識的思考は —— その誤謬が幸いして —— 「運動」だけを「力」の「現象」とみて、その「原因」としての「力」の存在を一義的に想定してきた。が、「運動」と「静止」を微分的小的關係において連続的、等価、すなわち「存在」一般の状態持続とみるライプニッツ・カントの立場、すなわち「現象」に則った本来の観察の場面では、「原因」としての「力」と「結果」としての「運動」の連続性は見出し得ず、それゆえ、「力」の作用「以前」の「物体の状態の外的現象」が既にもう「運動」 —— すなわち「存在」 —— であるように、本来「外的現象」は、因果論的な「力」の作用（すなわち「外力」の作用）には関係なく —— 慣性運動において「等速直線運動」と「静止」が等価であるのと同じように —— それが「運動」であるか、「静止」であるかには、そもそも無関係なのである。

ライプニッツが、「死力」という概念を持ち出したのは、前稿で確認した通り、「静止」状態を「運動」の「微分小」概念として連続的に、すなわち「活力」に転じ得る一つの系として考える、その故であった。従って、元来、「作用」とは関係のない、常識的な「運動」の概念と結び付けて、「（たとえば机上においてある球がその重さで机を圧しているような）静止状態で作用している物体」について、常識的発想から、それが「動こうと努めている」などというのは、ライプニッツの「死力」の概念とはおよそ関係なく、一層「ふさわしくない」ことでしかない（ibid.）。「なぜなら、そのように考えられた物体は動き出せば作用しないことになり、ある物体は作用することで、自分が作用しないような状態になろうと努めているのだ、などと言わねばならなくなってしまうからである」（ibid.）。「物体がある対象によって突然に運動を失うならば、それはその物体が静止させられ、作用する瞬間にそうなったのである」 —— 先回りして言えば、「運動」、より一般的に言い換えれば「変化」を論じるのに、「瞬間」すなわち「時間」の問題を考える必要があることを、カントは自覚している⁶ —— 。

カントの狙いが、「静止」状態の物質の様態も含めた —— カントにとって常識的に語られる「静止」は、本来的に「現象」における相対的「仮象」に過ぎない⁷ —— 物質の「存在」を可能にする原因としての「内在力」に遡り、そこから自余の「力一般」、すなわち「外力」をも含め、ライプニッツが企図した通りに連続的に一元的に世界を説明することにあつたのは、既に明らかにした通りである。カントの目論みは、その先を見越している。

「われわれが運動と名付けているものの起源を、作用力の一般的概念から導出することは極めて容易である」（I 19）。「作用」の概念を、「他の諸実体の内的状態を変化させる」ものと規定す

るとき、そうした「作用力」をもつ「実体 A」があるとして、「実体 A」は最初の瞬間に、「A のすべての力を引き受けるひとつの対象を見いだすか、見出さなないかのどちらかである」。この場合、いずれにしても、「作用」は、その「すべての力を引き受ける対象」の「内的状態を変化させる」だけなので、「運動」は起こりようがない。「われわれはまったく運動というものを見いだすことはなく、したがって物体の力を運動から特定することはできないだろう」。だからといって、その場合もし「実体 A がその努力の瞬間に自分の全力を発揮できない」とするなら、「力」は部分的に発揮されるよりないことになるが、そうすると「その実体の力はひとつの力とは言えなくなってしまう」。そうだとすれば、「同時共存的な状態」においては、「力」の「作用」ありえないということになり、かわって「力の作用」は「世界の第二の計量であるところの、事物の継起的な系列〔時間系列〕において見出されるしかない」、そうカントは言う (ibid.)。

「そうだとすると、物体はその力を一度にではなく、徐々に発揮することになる」。つまり「物体」は、次々の瞬間に、実体に作用することになるが、その都度実体は、論理的に一度に全力をうけとらないので、結果「物体」は、「まったく異なった位置と状態にある」実体に、次々に「作用」していくことにならざるを得ない。そうであるがゆえに、「物体 A が次々の瞬間に作用していく諸実体は、物体 A の最初の位置に対してそれぞれ異なった状態にある。それはすなわち、物体 A は継的に作用していくうちに、その位置を変えていく」、つまり「運動」する、ということである (ibid.)。

「作用」の概念の論理的規定から「現象」における「運動」の概念を「形而上学的」に —— 時間的変位として —— 導いてみせたカントだが（「運動」の概念規定が、「現象」における単なる「位置」の変化におかれているだけではなく（そこでは「時間」は「変化」の前提とされてしまっている）、「形而上学的」に、周到に、「時間変化」も含めた「異なった状態」「位置の変化」にあるとされている点に留意）、問題は、「静止」状態における「力」の「作用」の解明の困難さの方にこそある、とカントは言う。「静止状態にあって作用している物体は何をしているのか、ということがはっきりとわかっていないために、われわれはいつでも、抵抗を除去した場合に生じるだろう運動に戻って考えることになる」（第五節：「物体に運動力以外の力を付与しないと、物体の心への作用に関する学説にどのような困難が生じるか」 I 19f.）。だが、既に明らかなように、そうした常識的な「運動」からの逆算的思考法では、「力」の「作用」の実態 —— 「内在力」に遡っての、その「作用」の種類、範囲 —— は、何もわからないというのがカントの主張である。従来の、「物体の内部で生じているために目に見えない事柄について、その外的性質を捉えるには、そうした運動を使えば十分である」とする誤った思考法 —— 「運動」とは、正しく生起した力がなすところのことであり、また唯一のその結果であると一面的に見做されてしまっている誤謬 —— は、「力学や自然論の中では」問題化しにくくとも、「形而上学のなかにおいては」、重大な問題を惹き起こさざるを得ない (I 20)。

すなわち —— カントは言う —— 常識的な「力」の概念に立脚する限り、「物質がどのようにして人間の心の中で、実際に有効な仕方（すなわち物理的影響 *die physische Einfluß* によって）諸表象をつくり出せるのか、ということ」、またその逆の関係について、「考えることを困難にする」。そもそも「表象や理念などは、事物とは全く別種のものであり」、「単に運動を惹き起こすだけの力」がどのようにしてそれを作り出せるのか、「納得できない話」に陥らざるを得ない、のである (ibid.)。見られる通り、「力」の概念を「運動」から逆算して、その結果としての原因力とし

て想定する常識的逆算的思考法では、静止状態における物体内部の在り様について、何も考えることができず —— そのため静止状態の物質の内部ではどんな「運動」も起こっていないとされ —— そこから、ひいては「物質」が「意識」にどのように「作用」し、またはその逆がどのように説明されるか考えることを困難にしてきたのに他ならないとカントは糾弾する。そもそも「物質」と「意識」を「別種のもの」とする物質観・世界観自体が、こうした「常識」的発想からの逆算でしかない、そうカントは見ているのである。

「力」の概念の常識的思考法を批判して新たな「力」の概念を定礎し直すカントの目論みの理論的射程が —— 独自の「物理的影響」説の提起に発展して⁸ —— ライプニッツ「予定調和説」の発端になった「心身」問題を、真正面から取り挙げ直すことにまで及ぶものであったことは、その後の批判期にまで及ぶカントの思想展開を一貫した方向を持つものと考えるに際し、十二分に理解しておく必要がある。心身問題の解決は、物理的世界における物質相互の調和の問題を踏まえて、心と身体の調和の問題 —— 換言すれば主観的世界と客観的世界の調和问题、自由と必然性の問題すなわち新理論の問題の解決として世界観の成立そのものの問題 —— に及ぶ、哲学体系構築の根幹の課題である。カントはそれを、ライプニッツが「延長」に先立って物質の本性とした「力」の概念 —— それゆえ単なる「運動力」というネーミングから改名した —— 「作用力」の概念に基づいて、かつライプニッツの「予定調和」説に拠らず、むしろニュートン力学的な「物理的影響」説をとって —— つまりその点に限っていえば、「形而上学的」ではなく、近時の発展目覚ましい「経験」科学の成果を思う存分取り込めるよう修正しつつ —— 解決してみせるのである。それが、カント前批判期哲学の主題の実相である。

2. 「物質」と「意識」：「実体」概念の再定義とその射程

ライプニッツの「作用力」の概念を「形而上学的」に拡張してカントは言う。

「だが、物質の力を運動ではなく、それ以上は精細に規定できないような、他の実体への作用として考えれば、これら双方の困難を解消し、かつ物理的影響を不判明なものにしないでおくことができる」（第六節：「物体への心の作用という話から生じてくる困難、また作用力一般という規定によって、どのようにしてこの困難が排除されうるか」 I 20）

カントは、「感覚が教えるところのもの以上」の「形而上学的」な「作用力」に依拠することによって、「意識」と「物質」の関係、即ち「心身」の関係 —— 物質が異質な表象を生み出し、表象の総合である意識が異質な物質に作用する、これまで定義上不可能とされてきた二実体相互の関係 —— を、まずは異質性を飛び越えて、「作用」の事実可依拠し直して一元的に、事実媒介しているその事実から説明する、独自の「物理的影響」説を提起し、それにより —— ライプニッツ的な「予定調和」の概念に拠らずに、その構図は残したままでの —— 世界体系の構築を試みる。

「すると、心が運動を引き起こせるのか、あるいは心には運動力あるのかという問いは、次のように変わることになる。すなわち、心の本質的な力は外部への作用と規定されるのか、あるいは、心は自分の外部にある別の存在者に作用してそれを変化させることができるのか、と」 (ibid.)

鍵は「外部」という概念にある。カントは、これまで異質な二実体とされてきた「意識」と「物質」が相互に「作用」しあう「場」を問題にし、「作用」が展開する「場」を「空間」と定義する——後に『自然モナド論』で「作用圏」と再定義される⁹——。「われわれが場所と呼んでいるものの概念を分析してみると、この概念が諸実体相互の作用を意味していることが分かる」(ibid.)。先に言われていたように(第五節:「物体に運動力以外の力を付与しないと、物体の心への作用に関する学説にどのような困難が生じるか)、常識的には「すべての物質の力は、せいぜい心その位置から移動させるという結果を齎すにすぎない」と考えられている(I 20)。つまり常識的にも、「物質的な力」は「心」に対し、「心」がその上にある物質的「身体」を介して、その場所を移動させることができるという事実は確認されている。ということはしかし、少なくとも「意識」が「物質」である「身体」とともにあって「作用」しあっていることは先ず事実であり、そこから「心」は「物質」が占める「場所」に自身の位置、すなわちその「外的」な「作用」の起点、「作用点」を持つと考えられねばならない——「心」が「物質」が占める「場所」に「位置」を持つのは、「心」が物質として存在するからと言われているのではなく、あくまで「形而上学的」にとどまる「心」の「作用」の「外的」発現点が場所を持つとされていることに留意が必要である——。「心は一定の場所にあると言うその理由によって、外部に作用できるに違いない」。これにより、「運動を引き起こすことができるだけだと考えられている物質が、心に何らかの表象や像を刻み付けることはいかにして可能なのか」という、従来「矛盾」と考えられてきた「命題」が解決できることになる。「動かされる物質は自分と空間的に連関しているすべてのものに、したがって心にも作用する」。「心の内的状態が外的状態と関連している限りにおいて、物質は心のうちの内的状態を変化させる」のである。

「心のすべての内的状態とは、心のすべての諸表象や諸概念の総括に他ならず、この内的状態は、外的なものに関連する限りにおいて、世界の表象状態と呼ばれるものである」

(「物体の力一般を作用力と名付けるだけで、物質が心を何らかの表象となるように規定できることが簡単にわかる」 I 22)

「物質」の「運動において有している力」すなわち「作用力」の概念に依拠し直すことで、「物質」が、「世界を表象している心の状態を変化させている」「物質が心に表象を刻み付ける」「仕方」が理解可能になる、とカントは言うのである(I 21)。

見られる通り、ライプニッツの「力」の概念の拡張から——常識的な顕現態としての「運動力」ではない——「形而上学的」作用力の概念に依拠し直すことでカントは、「運動」の再定義、「継起」としての「実体」相互の関係——すなわち「時間」的關係——を規定してみせ、今また従来の「存在」観では異質とされてきた二実体を、その「関係」の事実から、「作用」関

係としてそれを一元的な「空間」的關係において関係付け直しておいてから、改めてその「実体」概念の、「形而上学的」観点からの再検討へと進む。「意識」と「物質」は、その「作用」の事実から、今や相互に「作用」しうる、その意味で同質的な新たな「実体」として概念規定し直されるのである。

問題は、ライプニッツ的な存在の本質としての「力」の概念、「作用力」の概念に依拠し直すことによって、そこから構想される——「物体」と「意識」の区別を排し、その相互関係の事実を「現象」と「形而上学」の関係によって説明し直す——カントのこのときの新たな哲学的体系構想・世界観構想にとって、更に何が問題であり、どこまでそれが維持され得たものだったのか、である。実際それは、『可想界と可感界の形式と原理』（1770）までとされる所謂「前批判期」のいつまで維持され、いつ破棄されたのか、すなわち『純粹理性批判』で決定されたとされるカント本来の超越論的体系構想・世界観構想と何が違って、どのように新たに、或いは寧ろそこから連続的にその批判修正として、批判哲学構想・超越論的世界観構想が構想され直すことになったのか——再三本稿でも触れてきたように、批判期に算入される『自然哲学の形而上学的原理』（1786）と「前批判期」の構想上・世界観上の共通性が大いに留意されねばならないものであることは繰り返すまでもない——それが問題である¹⁰。

さしあたり本稿では、デヴュー時の『活力測定考』（1747）におけるカントの新たな哲学体系構想の理論的光芒が、いわゆる前批判期の続く一連の諸論考群——『天界の一般自然史とその理論』（1755）、「火に関する若干の考察」（同）、『形而上学的認識の第一原理の新解明』（同）——にどう継承され、彫琢されていくか、とりわけその視点に立ち直すとき、『自然モナド論』（1756）の解釈はどのように変わるか、を明らかにしておく。

先回りしていえば、『活力測定考』におけるカントの形而上学的経験的体系構想・世界観構想は、その後も「前批判期」を一貫して維持され続け、続く「運動および静止の新説」（1758）、「オプティミズム試論」（同）、「三段論法の四つの格」（1762）、『神の存在の唯一可能な証明根拠』（1763）、『負量の概念を哲学に導入する試み』（同）と展開され、『脳病試論』（1764）、『視霊者の夢』（1766）ではその「意識」実体の問題が「経験」的観察の側から再考に付され、また1768年の「空間における方位の区別の第一根拠」においてはニュートン力学の空間論的再考がなされ、主観的経験の展開と客観的形而上学的本質の展開における「経験」的真理把握の問題が改めて再考に付されながらも、哲学体系・世界観構想の枠組みそれ自体としては、『自然神学と道徳の原理の判明性』（1764）から『可想界と可感界の形式と原理』（1770）まで、一貫して維持され続けたと見ることができる——さらに言えば、その構想は『純粹理性批判』（1780）「経験の類推」ならびに「先験的演繹論」へと連なり、『自然哲学の形而上学的原理』（1786）「動力学」構想に結実したとみることができる——。何が批判哲学・超越論哲学構想の画期となり、「コペルニクスの転回」の端緒となったか考えるのに必須の発展史的問題である。

『活力測定考』第一部、第八節以降の検討に戻る。「意識」と「物質」との常識的区別を排する、新たな「実体」概念の再定義が主題である。

「実体」は、「外部の別の実体と何らかの結合ないし関係にあるか、あるいはないかのいずれかで

ある」が —— 「充足理由律」¹¹に基づく限り —— 「存在者」は「自己のあらゆる規定の完全な源泉を自分の中に含むものであるから、自分を現存させるのに必ずしも他の事物と結合する必要はない」ので、「実体が存在していて、しかも他の実体とは全く外的な関係を持たないということ」も、理論上は有り得るとカントは言う（第七節：「事物は世界のどこにもないにもかかわらず、現実存在することがある」 I 21）。「まだ誰にも指摘されていない」「この背理的命題」から更に、「世界のいかなる事物とも結びつかず、しかも互いに何らかの関係を持っているような存在」が多数ある「全く特殊な全体」「特殊な世界」が、理論上は想定され得ることになる。とすれば、「哲学の教室で、形而上学的な思考」によって主張されてきた「唯一の世界以上のものは存在しない」という考え方 —— 例えばライプニッツ的な最善世界観 —— は、維持されないこととなる。

継起的物理的關係に無い「同時的」な「実体」相互の関係を「表象」関係として —— その「表象」能力の極限として「意識」がある —— 構想されたライプニッツのモノドロジーが想起されてよいだろう。「意識」と「物質」の関係を一次元的関係性として再規定したカントは、ライプニッツの「予定調和」的世界観におけるモノダの「表象」関係をも、その「物理的影響」関係 —— 「物理的影響関係である限り、因果論的、時間継起的関係 —— で置き換えた場合の世界を問題にしていると考えることができる。世界の根本的關係として、「表象」関係ではなく —— 「意識」の關係においても —— 「物理的影響」関係を想定する場合、他の如何なるものとも「結合」関係を持たない自己充足的存在者があったとしたら、それは、世界とのどんな関係も持たずに存在することになる。

それゆえ、「神が何百万もの世界を創造したこと」は形而上学的に想定可能なのだから、以上の問題を未決定にしておかないためには、「世界」の「定義」に今一度、きちんと立ち戻らなければならない —— 「形而上学的」に決定不能である故に、「経験」に立ち戻らなければならない —— とカントは言う。

「世界とは同時的、継起的で相互に関連しているあらゆる偶然的な事物の系列である」。

（第八節：「ひとつ以上の世界が存在しうるということは、正しく形而上学的な思考においては真である」原注 I 23）

定義上、「世界」に算入されるのは、「その他の事物と現実に関係している事物」である。従って、哲学が問題にすべき「世界」は、さしあたり、「結合」関係にある諸物体によって作られる、この「世界」だけ、すなわち換言すれば主観的に「経験」可能な —— 偶然的な事物の系列である —— この世界だけなのである。

心身関係の再考察からライプニッツの「予定調和説」を、ライプニッツ的な「力」の概念の形而上学的拡張 —— 「作用力」概念の定礎、ならびにその展開としての「作用圏」の概念による「空間」の再定義 —— に俟って、「物理的影響説」で置き換えたカントの哲学的体系構成・独自の世界観構成は、すべての「実体」の展開、「結合」関係を、「物理的影響」として説明する、「動力学」的な「形而上学的」関係として定礎する一方で、その「展開」「結合」の在り様としての「秩序」すなわち「法則性」の認識には —— ニュートン力学の成功を筆頭とする —— 近年の目覚まし

い自然科学の発達を、「経験的」「偶然的」「真理」として読み込むしかないことを本質としていた。寧ろそこにこそ、「物理的影響説」に依拠するカントの真の狙いがあったといつてよい。

ライプニッツが、この世界の唯一絶対性を、その自然法則の絶対性も含め神の最善の選択として、神の「自由」と共に担保するために構想した形而上学的「可能世界論」を、カントは「眼前」の「世界」の「結合」の関係として——「物質」と「意識」の区別を排して、相互に「物理的」に「作用」しあう「実体」の関係として——「現象」として「経験」的に看取される真理の必然性と表裏一体の「動力学」構想・動力学的真理論によって置き換えることを企図していた。

ライプニッツ的な「力」の概念に立ち戻って、本質としての「力」を有する「実体」を巡ってカントは言う。「諸実体が自分の外部に作用する力を持たないとすると、空間も延長もあり得ないであろう。なぜならこの力がなければ結合は無く、結合がなければ秩序がなく、秩序がなければ結局は空間もないからである」（第九節：「諸実体が、自分の外部の作用する力を持たないとすると、延長も空間もありえないであろう」 *ibid.*）。そこからカントは、形而上学的には多様であり得る世界に対し、現実世界を動力学的展開として把握していくことの困難について語り始める。「困難」は、唯一であるはずの「力」の「動力学的」的展開に基づくこの世界の「現象」としての演繹的発現を、「誤り」を含み得る「経験」世界の中から、真理として如何に過たずに区別して定式化するか、という点にある。

「ただし、諸実体のこの力が外部に作用する際の法則から、空間の次元の多元性が出てくることは、洞察がやや困難な問題である。私はライプニッツ氏が弁神論のある個所で行っている、一点を通過して互いに垂直に弾ける直線の数の証明は循環論証ではないかと思うので、延長の三次元性を、数の累乗に見られるものから証明しようと考えてきた」（*ibid.*）

カントは言う。「ある事物の性質として生じるすべてのものは、その事物自身の完全な根拠を自分のうちに含んでいるものから導出されねばならないので、延長の諸性質、従ってまた延長の三次元も、諸実体が自分たちの結合している事物に関して持っている、力の諸性質に基づいていることになるだろう。「ある実体が他の実体と結合する際に作用している力は、その作用の仕方に現れる何らかの法則抜きには考えられない。諸実体がたがいに作用しあう法則の在り方は、多くの実体の結合や複合の在り方をも規定しているに違いないので、諸実体の全集合（すなわち空間）が計測される際の法則、すなわち延長の次元は、諸実体が自分たちの本質的な力によって結合しようとする際の法則に拠ることになるだろう」（第十節：「空間の三次元は、諸実体の力が互いに作用する法則から来るように思われる」 I 24）。いうまでもなく「延長」の諸法則は、「諸実体のこの力が外部に作用する」、すなわち「顕現態」としての「現象」の、それゆえ「経験」的な——先に見た通り、「原因」としての「力」の発現は、「結果」としての「運動」とは直接関係はない——「形而上学的」には真理法則の演繹展開と考えられるにしても、「経験」それだけではその必然性・真理性が保障されない、それゆえすべて「偶然的な」諸法則にとどまらざるをえないのに他ならない。

「こうしたことから、以下のように考えられる。すなわち、諸実体は、われわれもその一部分

をなしている存在する世界においては、互いに結合する際に、距離の二乗に反比例して自らを拡張するような類の力を持っているのである。第二に、こうして生じてくる全体は、その法則の為に三次元という性質を持つことになる。第三に、この法則は任意のものであり、神はその代りに別の、たとえば三乗に反比例するという法則を選択することもできただろう。そして最後に、第四として、別の法則からは別の性質と次元を持った延長が出てくるだろうということである」

（「三次元は、存在する世界において諸実体が、作用の強さが距離の二乗に反比例するように、互いに作用することによると思われる」 I 24）

見られる通りカントは、動力学的に演繹的展開として形而上学的に説明される諸実体の結合関係すなわち世界の成立と、経験的に看取され帰納的に法則化されてきた自然科学的・物理的法則との重ねあわせ、一体化を —— それを正確に原理的に「困難」と認めつつ —— 目標としている。「経験」的に看取される現実世界の真理問題における一方での重視は、その空間的「三次元性」を、知覚され、構想され得る理性の唯一の可能性、と認める以下の議論でも基本とされる。先に懸案とされた、形而上学的には神は多数の世界を作り得るという可能性に対しても、それが実際に三次元世界であれば、この現実世界と連続し、三次元以外の世界であれば、この世界との連続が不可能で、分離してあることになるが、しかしそれでは「完全性」が目指されるはずの神の世界創造に悖る以上、そのような分離世界の創造は「(それ自体としては可能であるとしても) 見込みはなさそう」と結論されるに至る —— 「物理影響」説的に改鑄された「最善世界観」である（第十一節：「多くの世界があるのではないかと推量されるための条件」 I 25） —— 。加えてカントは、「われわれもその一部分をなしている存在する世界」として、「意識」である「われわれ」が「存在する世界」に一元的に組み込まれていると銘記しているが、そこからカントは、「われわれは三次元以上の空間を表象することは不可能だと自覚するが、この不可能は思うに、われわれの心もまた距離の二乗に反比例すると言う法則に従って外部からの印象を受容するのであり、われわれの心の本性そのものがそのように受容するばかりでなく、外部に作用する際にもこの法則に従うようになっていることによるのであろう」とまで言っている (ibid.) 。

以下、「最近の哲学は物体の本質的な力についてある種の概念を確定しているが、ただしそれを承認することはできない」と書き出される、第一章「物体の力一般について」第十二節から第十九節の議論は、『活力測定考』本来の主題に即して、カント的にとらえ返されたライプニッツの「活力」概念の近時の「経験」科学との対質に絞られる —— カントは自身認めているようにライプニッツの「活力-死力」概念そのものに対しては、何ら批判の必要を認めていない（「そもそも私は本書においてライプニッツ氏の見解にある異議を唱えようとするものであるから、本節で彼の見解を確証するような証明を提示すれば、自己矛盾をきたすようにも思われるだろう。ただし、私は最終章において、ライプニッツ氏の見解はある程度制限されてはじめて、現実にかけることを示すつもりである」（第十七節、原注） —— 。ライプニッツ「予定調和」説の形而上学的制約を自身の独自の「形而上学的」な「物理的影響」説によってクリアしたことをもって、最新の力学的経験的知見との対質を可能化したカントは、その対質を通じ、「活力-死力」の概念系を、数学・自然科学の成果と連続可能な計量科学として彫琢し直すことをもって、その『活力測定考』本来の企図とする。

第一章の残りの議論は、その形而上学的準備に宛てられる。その仔細は前々稿で既に検討しておいたので、ここでは要点のみ再確認しておきたい。

「ハンベルガーの説」を筆頭に「最近の哲学」における「力」の「形而上学的」想定を含むものに対しカントが向ける批判は、いずれもその形而上学的な力の規定が計量化に耐えない点に向けられる（第十二節 I 26f.）。そうした誤謬の理由は、冒頭批判されていた、「運動」だけを「力」の「結果」とする常識的な「力」の概念の設定にある。そうした「力」の「作用」観では、「外力」による「運動」の変化を、「変化」としては説明できても、その後の「持続」を説明できない（第十三節 I 26）。同様、「有限な強さの度をもつ」べき「力」に対し、従来の力学がとってきた、運動の増減だけを「力」の収支とする力学的計算方法では、「衝突」後の —— 「慣性力 *vis inertiae*（慣性抵抗）」によって「力」を奪われたのちの —— 「外力」の収支しか計算されず（実際には「内在力」との収支が勘案されなければならない）、「貫通する」のでない限り、計算結果は理論上非現実的なものとならざるをえない（第十四節 I 27）。

カントが考えているのは、言うまでもなく、「現実」に生じる「運動」を説明する、「形而上学的」「力」の —— 「形而上学的」領域から「現象」領域までを一元的連続的に説明可能な —— 法則を「経験」の側から、すなわち「幾何学的（数学的）」「物理学的」に定式化する必要である。「あらゆる運動を二つに大別」し（第十五節：「運動の二重の区分」）、「第一の運動」「活力」が、「運動が伝えられた物体の中に含まれており、障碍による抵抗がなければ無限に持続する」という性質を持つ」として —— 「例は「発射された弾丸ないしすべての投げられた物体」 —— 「死力」すなわち「常に駆動する力の永続的な作用であって、それを消失させるのに抵抗などは必要とせず、外部の力のみに基づいており、その力が持続しなくなるだけで、ただちに消えてしまう〔運動〕」と区別し —— 「死力」の例は「手でゆっくりと〔加速を生じないように〕押された球、あるいは何かに載せられていたり適度な測度で引かれているあらゆる物体の運動」（I 28）、すなわち「見かけ」の「運動」 —— 「活力」を、実体の本質としてすべての実体に内在する、ライプニッツの、「無限の」「自らは不滅である力の内的な源泉である」「内在力」「作用力」とし、また「第二の運動」が、「死力」すなわち実体それ自体には内在しない（それゆえ見かけ上は「静止」と見える）、「見せかけの力」としての「外力」 —— 「部分的には自ずから消失し、また駆動力がなくなれば直ちに突然おのずと消滅する」「力」 —— によって引き起こされる「運動」として、且つこの二つの「運動」は、いわば非連続の連続として関係し、一つの系を形成するものであり、「後者の前者に対する関係は、時間に対する瞬間、ないしは線に対する点のようなもの」と規定し直すこと（第十六節：「第二の種類運動は死圧と区別されない」 *ibid.*）、それがカントの形而上学的「活力・死力」関係の、「経験的」「幾何学（数学）物理学的」規定である。

カントの主題は、「障碍のない空間の中では永遠に自らを保持する運動」、すなわち実体の本質の発露である「活力」が産みだす本来の「運動」の、正しく「形而上学的」な「力」の概念の形而上学的展開に則った解明と、そうした「実体の本質」の運動に関わらない「経験」世界における「見かけ」の「外力」すなわち「死力」の関係を、連続的・一元的に計量可能なものとして定式化することにある（第十七節：「第一の種類運動は速度の二乗に比例する力を前提とする」）。内的「作用力」として「現象」内に「存在」をもたらす状態持続すなわち「自由運動」させる「活力」も、「外力」としての「死圧」も —— 「存在」は「運動」の極小、ないしは相対的「静止」として考え

られている —— その「運動」に対する「抵抗」を共通の測度として考えられていることが見て取られねばならない。

「ある物体が自由運動をしながら、無限に微細な空間の中で動いているとき、その物体の力は、物体が永遠の内で行うすべての作用の総和によって測ることができる」。「空間の微小部分への両者〔物体 AB〕の作用は両者の速度に比例しており、またそれらの微小部分の数も同様に速度に比例する。その結果、一方の物体の総すべての作用は、他方の物体の全ての作用に対して、それらの速度の二乗の度合いの量を持つことになり、それらの持つ力もこの比に相当することになる」(ibid.) 「死圧の力は、力を与える物体自身の内にあるものではなく、外部の力によってなされるものなので、その外部の力に打ち勝つ抵抗は、物体の中で死圧の力が保持しようとする強さという点では、特に何らかの努力を必要とはせず(その力はいかなる意味でも作用する実体の内に根差してはいないし、実体の中で自らを保持しよう努力しているわけでもないで)、せいぜい物体に位置の変化をもたらす速度を消去しさえすればよいのである。だが、活力の場合には話は全く異なる。実体が自由運動をしながらある一定の測度で動き続けている際の状態は、全くその内的な諸規定に基づいているので、先ほどの同じ実体は同時に、自らをこの状態に保持しようとする努力している」(I 30) 「そのために外部の抵抗は、この物体の速度に拮抗するために必要な力以外に、今ひとつ特別な力を、物体内部の力がこの運動の状態を自ら保持しようとして行う努力を打破するために、持たねばならない。そこで、自由運動をしている物体を停止させるのに要する抵抗の全体の強さは、測度の比と、その物体が自らその状態を保持しようとする努力している際の力の比との合成比にならなければならない。双方の比は互いに等しいのだから、つまるところ抵抗が必要な力は、動いている物体の速度の二乗に比例することになる」(ibid.)

速度の二乗を基にする比例関係として、「第一の種類運動」と「第二の種類運動」 —— 即ち「活力」と「死圧」 —— が、ともに「運動」すなわち「速度」に対する「抵抗」を測度として、数式として事実上統合される点が注目されねばならない。その説明を持って、カントの、「活力」概念の形而上学的基礎づけ —— 即ち「活力」現象を定式化している数式の形而上学的意味付け —— の目論みは達成されたと言える。以下、『活力測定考』第二章、第三章で展開されるのは、そうした「形而上学的」基礎づけを踏まえて規定された「力」の概念の、「経験」的に定式化された諸法則との対質であり、その検証を通じての「動力学」的の法則の演繹的彫琢である。

こうした試みについて、事前にカントは言う。

「私が今後保留しているある考察の構想である」。

第十二節以降、議論を本書『活力測定考』の主題に即して、「活力」概念の再検討を通じた「実体」概念の再定義に限定するにあたって述べられているカントのこの言明を —— ライプニッツの「予定調和」説的「形而上学的」世界観の、「物理的影響」説による「経験」的科学的読み替えの試みとして —— 以後の所謂「前批判期」の思想展開の方向を射程するものとして理解しておく必要がある。

3. 「実体」概念の経験的再定義：『自然モナド論』の真相

前節で改めて確認した通り、カントのデヴュー作『活力測定考』（1747）第一章の「形而上学的」「力学」構想の理論的射程は、物質の本性としてライプニッツの「内在力」を認め、その「作用力」としての展開をもって、「存在」の発現理由から状態維持——「運動」の極小としての「静止」時の「慣性抵抗」（「慣性質量」）から実体の本来的「運動」の維持まで——を一元的連続的に説明し、重ねてその本質=法則性=真理を、「経験」値である「二乗に比例」するものとしながら、他方またその「作用」概念から、従来経験的に異質とされてきた二実体——「物質」と「意識」——間の直接的な相互作用を独自の「形而上学的」「物理的影響」として認め、もってライプニッツの「予定調和」的世界観の構図を崩さないまま、汎通的一元的に捉え直された「実体」相互間の「物理的影響」関係を、最新の「経験」的科学的知見に照らし合わせて個々具体的に確定してゆく、体系構築を射程した十分根本的原理的なものであった。その後の、所謂「前批判期」の思想展開——先ずは『天界の一般自然史とその理論』（1755）¹²、『形而上学的認識の第一原理』（1755）¹³——が、その「内在力」「作用力」の個々具体的な展開過程として世界生成を説明する一環であることは見易い事実だが、本稿では『自然モナド論』（1756）の検討に進んでおきたい。「物質」と「意識」の「予定調和説」関係を独自の「物理的影響」理論で刷新する『活力測定考』でのカントの革新的な「実体」観に基づけば、『自然モナド論』の主題には、「物質」と「意識」の「形而上学的」関係、即ち「作用力」を介した「物理的影響」関係の解明、換言すれば当時の講壇哲学の主流であったヴォルフの物理科学的実体論——即ち通俗的に解された「自然モナド」——への批判が含まれるはずだからである。

『自然モナド論（*Monadologia Physicae*）』「まえおき」は、経験的自然科学の不足を批判し「形而上学」の必要を強調するカント哲学のスタンスが簡明に記されているので引用しておく（I 475）。「自然事象の探求に取り組む目端のきく哲学者たちは少なくとも次の点に同意してきた。すなわち、理由もなしにいわば勝手な推量で捏造したものを自然科学に紛れ込ませることや、経験の支持と幾何学による解釈なしに何かを企てることは、現に避けるべきである、と。「だが、死すべき者たる何人も右往左往せず真理の道をまっすぐに絶え間なく前進できるはずもないのだから、絶えずこの方法に従う者は、真理の探究に際して大胆に沖に出るようなことは敢えてせず、いつも海岸に沿って進むことをよしとし、経験の証言によって直接確かめられること以外何も認めようとしなかった。「確かにわれわれはこうしたやり方でも自然法則を提示できはするが、法則の起源も原因も提示できない。「それゆえ、たいていの人々が自然学の領域では当然、形而上学などなくてもやってゆけると思っているにせよ、やはり形而上学こそこの領域で唯一の支柱であり、光をとすものである」。

前節で確認した、「形而上学」と「経験」科学の関係を巡るカントの思想を髣髴とする記述だが、こう述べておいてカントが、続けてその「形而上学」的考察の実際として次のように記しているのは十分に注意されておく必要がある。『自然モナド論』全体の主題と構想にも関わる例示である。「というのも——カントは続ける——物体が諸部分からなるとして、物体がそれら諸部分から

どのように合成されているか、物体が空間を占めるのは根源的諸部分の単なる共存に拠るか、それとも力の相互葛藤に拠るか、といったことを明らかにすることは確かに少なからず重要だからである」—— 以上のようなことをカントが、少なからず「形而上学」に関わることとして考えていることが重要である——。更にカントは続ける、「ところでいったい、この仕事で形而上学は幾何学といかに提携できるのであろうか」。カントの主題が、「形而上学」と「幾何学」すなわち数学との提携にあることを明らかに示す記述である。

「実際、超越哲学はその空間の無限分割可能性を頑強に否定するのに対し、幾何学はこれを他のものを主張する場合に慣れているのと同じ確実性で主張するのである。また幾何学は自由運動には空虚な空間が必要だと主張するのに対して、超越哲学はこれを排斥する。幾何学が万有引力もしくは普遍的重力が機械的原因からは到底説明できず、静止物体に内在し遠隔作用を行う力に由来すると言明すれば、超越哲学はこれを想像力が持て遊ぶ虚しい玩具として遠ざける」

(I 475f.)

もはや確認するまでもないのだが、『自然モナド論』は——『活力測定考』で表明された、ライプニッツ的「形而上学的」「力」の概念すなわち「内在力」「作用力」論を踏まえた、「形而上学的」な「実体」論である。「物質」と「意識」を区別する、自然科学的常識的な「自然」実体論ではないことに留意が必要である。

従って、「まえがき」の締め括りとして述べられたカントの次の言明も、注意して読まれる必要がある。

「全ての内的作用の素因もしくは諸要素に内在する力は運動力 *motorice* に違いなからう。しかもこの運動力は外に現存しているがゆえに、外から作用する」

(I 476)

「全ての内的作用の素因もしくは諸要素に内在する力」は、「内的」である限り——『活力測定考』での規定に従えば——「内在力」に他ならない。それがしかし、ここでは「外に現存している」がゆえに「運動力」と呼ばれるのであり、そうである限り、「外から作用する」すなわち「外力」と等価なのである。

この文脈では、カントが、「経験」的常識的な視点で記述していることに注意が必要である。「共存する物体を動かす力」として、ニュートン力学に倣い「斥力」と「引力」の二つしか考えられないとするカントが挙げる根拠も「経験」的なものである。「もし遠くへ遠ざける力〔斥力〕だけを仮定すれば、物体を合成するための要素の結合は考えられず、考えられるのはむしろ要素の分離である。これに対し、もしひきつける力〔引力〕だけを仮定すれば、なるほど結合は考えられるとしても、一定の延長や空間は考えられない」。

このように、想定 of 正しさを「経験」的に裏付けておいてカントは、改めて次ように言う。探求されるべきは、「経験」から正しさが確かめられたその想定 of、「形而上学的」すなわち「現象」以前の「本質」のそのメカニズムである。

「この二つの素因を要素の本性そのものとその根源的性質から導き出すことに成功する人が現

れば、物体の内的本性の解明に関して軽視できない重要な貢献をなすことになる」（ibid.）

第一章「幾何学と一致した自然モナドの存在を解明する」以下カントの論述は、精確に如上のカントの執筆企図 —— 「経験」的な科学的知見に対する対質を通じ、諸現象を総合的・数学的に説明しうる「形而上学的」メカニズムを彫琢する —— に沿って展開される。ライプニッツ・モナド論それ自体の哲学的意義の確認は、既に前稿で行ったので、ここではそこに重ねて展開される、カントの哲学的目論みに焦点を当てて検討しておきたい。

「命題Ⅰ モナドと名付ける単純実体は互いに離れて存在しうる多くの部分からなるのではない」（I 477）は、カント的に再定義された「モナド」の規定であり、その根拠は後の諸命題が示すことになる。

「命題Ⅱ 諸物体は諸々のモナドからなる」（ibid.）は、現実の「諸物体」の「合成」を説明するもので、カントは、「このような諸部分からの合成」は、「ある関係」であり、「ある物体のすべての合成を廃棄したとしても、事前に合成されたすべての部分が存続することは明らか」であるような「それ自身偶然的な規定」としている。「物理的影響」説にシフトしたカントが、経験科学的・ニュートン力学的な原子論的世界観に、自身の「実体」観を重ねていると考えられるが、「原子」としての「実体」が「実体」として、その存在を含むすべての根拠を内含する以上 —— 「原子」論的存在観（「充足理由律」と等価ゆえの置き換え） —— どんな他の実体とも結合しない可能性、独立に世界を成す可能性について、『活力測定考』で示されていた懸念が想起されてよいだろう。続く「注解」でカントが、「私は目下の証明では熟慮の上、かの有名な根拠律を度外視」する、としているのは（ibid.）、こうした問題の拡がりがかントの念頭にあったためとも考えられる。

「命題Ⅲ 定理 諸物体が占める空間は無限に分割できる。それ故空間は根源的で単純な諸部分からなっているのではない」（I 478）は、続く「命題Ⅳ 定理 無限に分割できる合成体は根源的部分即ち単純な部分からなっているのではない」（I 479）とセットで考えられなければならない。「まえおき」でも例として挙げられていたように、『自然モナド論』執筆の核心に当たる議論であり、「実体」の「本質」を「内在力」「作用力」とするライプニッツ的「力」の概念からその問題の「形而上学的」解決が企図される。

「命題Ⅲ 空間の無限分割」は、確認するまでもなく、ライプニッツがデカルト「延長」説 —— 「実体」の「本質」を「延長」とみる（幾何学的（数学的）世界観） —— に対して批判として提起した「連続律」の正しさを再確認するものである¹⁴。問題は、「空間」が「無限に分割可能」であるとき、世界を構成する「実体」がこれ以上分割できないもの、「モナド」として「在る」とする場合に、その「存在」を —— ライプニッツのように「モナド」を「幾何学的（数学的）」存在と考えるのではなく、その「物理的影響」観から「物理的」なものとするカントにとって —— どのように再定義できるか、にある。従来、空間の無限分割可能性を主張する幾何学（数学）に対し、原子論的「存在者」を立てて応酬する物理学が、その「存在者」が占めることになる「空間」の分割可能性をどう考えるか、として争われてきた議論が背景にある。

「命題Ⅳ 注解」でカントは立証にとりかかる（I 479）。「私は物体の根源的単純部分というものを確立するとともに〔命題Ⅰ、Ⅱ〕、空間の無限分割を主張した〔Ⅲ〕¹⁵」。重ねて「命題Ⅳ」

で「モナド」を「物体の無限小の粒子ではない」と再確認した理由は、「全く実体性を欠くとともに、単一な諸々のモナドの外的関係の現象である空間は、無限に分割を続けても尽くされることが全くないことは、このように十分に明らかである」からである。それに対し、「モナド」ではなく「合成体」の方は、「合成は偶有的にほかならず」、先に見たように、「すべての合成を廃棄したとしても、合成された全ての部分が存続する」（命題Ⅱ）——「合成の実体的基体が在る」——のだから「合成体が無限分割を許容することは事柄にそぐわない」。「〔命題Ⅳの〕系 ゆえ、あらゆる物体は一定数の単純要素からなっている」。

以上を総括して、「命題Ⅴ」でカントは次のように繰り返す。

「命題Ⅴ 定理 物体の単純要素すなわちモナドはいずれも空間のうちにあるばかりでなく、空間を満たしもするが、にもかかわらず、自身の単純性を損なわない」（（Ⅰ 480））

さしあたりカントの証明は以下のようなものである。確かに「物体」を構成する、それ以上分割できない「単純要素」としての「モナド」は、無限分割可能な「空間」を占めるが、「だが、空間の分割は一つの部分が他の部分から隔たってそれ自身の充足した存在を有するような分離ではなく、外的な関係における数多性、何らかの量を明示するに過ぎないから、そこから実体的部分の数多性が帰結しないことは明らかである」。ゆえに「空間の分割可能性」は「モナドの単純性に反しない」（*ibid.*）。明らかかなように、「それ自身の充足した存在を有する」のではない、「外的な関係における数多性、何らかの量を明示するに過ぎない」とされている「空間」規定が、問題である。

続く「注解」でカントは、「要素の探求の際に幾何学と形而上学とを結合するために他のどの見解にもまして大きな妨げとなっていた」のは、「次のような見解である」と言う。

「要素の占める空間が分割できることは、さらに要素自身が実体的部分に分割されることを示している」とされる」

この誤謬が無限分割論者に「モナドを毛嫌いさせ」、モナド論者に「幾何学的空間の性状を自分たちの単なる想像であるかのように」考えさせてきた元凶である。「だが、上の証明から明らかにわかることは、幾何学が誤っているのでもなければ、形而上学にとどまっている見解が真理にもとっているのでもないということである」。真相は、「実体たる限り絶対に単純な要素はその単純性を損なわずに空間を占めること」ができる、のである。カントは根拠として一先ず幾何学的・数学的な例、「空間を二分割する線もしくは面」を持ち出して、分割する「線または面」の一方が、自身が属する空間の部分の「全く外」にあることを示してみせる。が、肝要なのは、「空間は実体ではなく、実体が外的関係として現象したものなのだから、同じ実体のある関係は、実体の単純性もしくはいわば実体の統一と矛盾することはない」とされている点である。既に明らかにカントは、自身の独自の「実体」概念規定に踏み込んでいる。「独自の存在はとりわけ単純性を維持するような実在的分割のために必要だとされるだが、実はそれは同一の実体の両側に生じた作用もしくは関係なのであって、そこにはなるほど何らかの数多性が見いだされるが、だからと言ってそれが実体そのものの分割とはならないからである」（*ibid.*）。このときカントが、「実体」と「実体」の関係として、何

をモデルに考えていたか、が鍵になる。

続く「命題VI」でカントは次のように言う。

「命題VI 定理 モナドは、自分の現前する小空間を自分の実体的諸部分の数多性によってではなく作用圏によって区切り、これによって自分の両側に現前する他のモナドがそれ以上互いに接近されないようにする」(I 481f.)

新たに導入された「作用圏」という概念に留意が必要である。先に見た、『活力測定考』で定礎された「実体」の本質としての「作用力」概念に連なる規定だが、直接的な「接触」を本質とする「物理的」作用とは区別して、カントが、「作用圏」として、その「作用」が「自分の現前する小空間」をその範囲として「区切り」、「これによって自分の両側に現前する他のモナドがそれ以上互いに接近されないようにする」と慎重に規定していることに注意せねばならない。続く「命題VI」の「証明」でも、先ず「いずれのモナドも単独で、ある空間を満たしている」事実が挙げられ、次いで「空間を満たしていることの根拠は単に実体の位置だけではなく、実体の他の実体に対する関係に求められるべきであろう」とされる(I 481)。「実体」である以上、それが「場所」に「位置」を持ち、そこを起点として他の実体との「関係」「作用」を持つ、というのは『活力測定考』における、「意識」と「物質」の、新たな「物理的影響」関係が立言されたときのロジックである。まさにそこでカントは、ライプニッツが「予定調和」説において「表象」関係とだけ説明した「心身」の関係を、「作用」関係の事実から、「意識」「物質」の二元論的実体規定それ自体の見直しを視野に、その「場所」における固有の「位置」からの「作用」関係を、新たな「空間」として「形而上学的」に規定し直していたのだった。

見られるとおり、この時のカントは、明らかに『活力測定考』の形而上学的基礎論で語られていた「意識」モデル——物理的世界すなわち身体上に出現点として、決して他と重なることのない¹⁶「位置」(「心」)を持つ、そこを起点として他と「関係」する「表象」の範囲としての「意識」実体——で発想している。そうである限り、『自然モナド論』のタイトルで言われている「*physicus*」は、従来そう考えられてきたような——ヴォルフ派の——「意識」と「物質」とを異なる実体とするデカルト・ニュートン自然科学的な意味での「自然」と理解されるべきではなく、カント独自の、「意識」と「物質」とを、内在する「作用力」によって相互に影響し得るものと見做す、一元論的な新たな世界観の提起としての「物理的影響力 *die physische Einfluß*」を持つモナド」との意味で受け取られるべきである。従来、その前批判期の思想的発展の経緯が見過ごされ、誤ってそれが、近代自然科学主義的世界観から遡及して、「意識」とは実体的に区別された「物質」としての「自然」のみを表わすものと受け取られてきたために、『自然モナド論』が、却ってライプニッツ的形而上学を全面否定する、カントのデカルト・ニュートン的な自然科学へのシフトであり、批判期にカント自身によって否定されたものと見做される誤謬が一般化してきた。

「実体は実際空間を満たすことによって自分の両側に直接隣接する実体をそれ以上互いに接近させないようにし、さらにそれらが自分に近づきうる接近距離を決定することによって、それらをそれらなりの位置に限定するのだから、モナドがある作用を、しかも如何なる方向に関しても限定

された空間の中で行使していることは明らかであり、この範囲内の空間はモナドのこの作用圏で満たされていると認められるべきである」 (ibid.)

付言するまでもなく、カントが想定する「物理的影響」関係にある「実体」観においては、物質的実体だけでなく、意識的実体も —— 一つの身体の上に一つ以上の心が位置を占めることがないように —— 「位置」を占め、「直接隣接する実体をそれ以上互いに接近させないようにする」のである。

続く「命題Ⅶ」は「問題」である。

「命題Ⅶ 問題 それぞれのモナドがその単純性を失わないまま作用圏のおかげで占めている空間〔という一見矛盾した概念〕をこれ以上の困難から救い出すこと」 (ibid.)

カントの解答は、「空間は外的関係によってのみ成立するので、実体の内実即ち実体そのものはどのようなものであるかに関わりなく、外的規定の基体として、本来空間によって規定できず、その外的規定に数えられるものだけを空間のうちに求めるのが道理」というものである。

「この空間そのものは、この要素の外的現前の範囲である。それ故、空間を分割するものは要素の現前の延長を分割する。実体の外的現前すなわち関係規定のほかに内的規定がある。もしこれがなければ、外的規定は帰属すべき基体を有しないことになるであろう。ところが内的規定は空間内には存在しない。内的規定は将に内的であるがゆえに、空間内には存しない。従って、それはまた外的規定が分割されても自身は分割されず、その基体自身即ち実体もまたこれによって分割されない」 (ibid.)

それを「分割される」というのは神が内なる仕方で現存している被造物としての世界を分割することが、神を分割することになるというに等しい、とカントは批判する。言われている「実体」が、『活力測定考』で確かめられていた「内在力」の論理よろしく、「形而上学的」に「内的に」在って、その「単純性」（「一性」）を損なわれることなく「外的」に「位置」をもって「現前」し、その「作用圏」としての「外的現前の範囲」すなわち「空間」を持つ、とされているのであることは、最早絮言するに及ばないであろう。

「命題Ⅷ 定理 ある物体の単純要素がその空間を占める力は、他の処では「不可透入性」と呼ばれるものである。もしこの力が退けられるならば、不可透入性のための余地もあり得ない」 (I 482)

第一章の最後、「命題Ⅷ」に至ってカントは、「力」の概念を持ち出す。物理学で「経験」的に「不可透入性」と呼ばれてきたものの形而上学的実相が「ある物体の単純要素がその空間を占める力」である。自らの「作用圏」である「空間」に「位置」を持ちながら、「形而上学的」「実体」として「空間」を占める —— その限り、物理的「存在」を持たない —— 幾何学的「モナド」は、しかしその「空間」を占めるのに、「起点」からの物理的「作用力」を持たねばならず、それに重ね

てその反作用力=斥力としての「不可透入性」を持たなければならないのである。

「モナドは単に実体として措定されただけでは空間を占めることはできず、ただ場所を有するだけであるから、その実体のうちには何か他のものが欠けているに違いない。そして、そのものは左右両側に隣接する両要素に対してその近接の限度を限定し、それらの要素をそれ以上近づける力を一切阻止するものである。だが、力にはやはり力しか抵抗することはできない。ゆえに物体の要素が空間を占めるためのまさにその力が不可透入性を引き起こす」 (I 483)

「要素はその特定空間を、そこに他の要素が侵入してくるのを阻止するある種の活動によって満たしている。ゆえに、物体の不可透入性要素のかの自然力以外の何物にも依存しないことは明らかである」 (I 482)。

続く第二章をカントは、「自然モナドの最も一般的な諸性質を、物体の本性を理解するためにさまざまに役立つ限りで解明する」として、「経験」的に解明されている「現象における諸法則の規定、「斥力-引力」概念、「慣性力」概念、「弾性」概念」との自身の「実体」規定・その本質としての「内在力」規定との対質に充てているが、これは『活力測定考』と同じ構構であり、第一章を自身の形而上学的力学構想に基づく体系基礎論として展開し、第二章を、顕現態としての「力」の「現象」の、「経験」的な近年の物理学的成果との対質にあて、それを通じた、「形而上学的」「内在力」の計量科学化を目指したのと同趣の構成といえることができる。

概略辿っておけば、形而上学的に本質的に無規定だった「内在力」は、従来伝統哲学において「存在」の本質とされてきた「不可透入性」と重ねられ —— ニュートン力学においても「不可透入性」は「剛体」の構成要件である —— 、更にそれを具体的に数値化するべく、ニュートン力学における「斥力」概念に重ねられる。「斥力」概念は、その反作用力である「引力」とも等価であり、両力の均衡によって「要素」が合成する「物体」の「大きさ」が決定される。「物体」の要素としての「実体」の「内在力」は、このようにしてニュートンの万有引力に発する「引力」概念に重ねられ、数値化されて「経験」的定式化にかかるものとなる。こうした諸力の総和から「抵抗」としてのその「物体」における「実体」の「内在力」が決定され、その「抵抗」の総和がその実体の「質料」すなわち「慣性力」(「慣性抵抗」) —— 「静止」を「運動」の極限として区別しない、「実体」の「存在」としての「運動」を産む「内在力」 —— として数値化される。

総じてカントは、ライプニッツがそのモナドの形而上学から本質展開的に世界形成を説明して憚らなかったのに対し、逆のベクトル —— 形而上学的「実体」論「本質」論を立てながらも、それを極力「経験」の側から規定し直し、可能な限り計量化・数値化する方向 —— で、自身の志向を展開していったといえることができるだろう。『純粹理性批判』「経験の類推」論に結実し、「超越論的演繹論」の問題 —— すなわち主観的である「経験」のうちに客観的真理がいかんして現象し得るかの証明問題 —— を生み出す構図は「前批判期」からのものであったと言って少しも過言ではないように思われる。

本稿の主題は「前批判期」と呼ばれるカントの初期の一連の論考群を、デヴュー作である『活力

測定考』で披瀝されたライプニッツ的「力」の概念、「内在力」「作用力」理論の線上で読解することになった。見られる通り、諸論考はその構想上で一貫して解釈されることができ、とりわけ従来、自然科学的・物質的モナドのみを取り扱ったと見られてきた『自然モナド論』は、「作用力」概念を基にした「物質」と「意識」の二元論的区別を超える、その双方を含む独自の「実体」概念論として解釈されねばならないものであった。この構想は、続く『オプティミズム試論』はもとより、基本構図としては『可想界と可感界の形式と原理』まで一貫し、のみならずカント哲学の体系的構図として、『純粋理性批判』を超えて『自然哲学の形而上学的原理』まで一貫して維持され続けたと考えることができる。

現代の実体化を排する「力」の概念観、力の概念の否定から見れば、物理学的次元ではむしろ積極的に「現象」・「現前」態としての「力」の現象の、「経験的」「偶有的」規定、定式化に取り組むカントが、にもかかわらず、その「原因」としての「形而上学的」次元を捨てることなく、「作用力」「内在力」を「形而上学的」「基体」として残し続けていることは、如何にも力の実体化・物象化以外の何ものでもないと見られるであろう。しかし、カントの「形而上学的」な「実体」概念の再定義が、ライプニッツの『モナドロジー』成立の事情を念頭に、「心身」問題、すなわち異質と考えられてきた二実体 —— 「意識」と「物質」 —— の関係問題の問い直しをも最初から射程に入れた将に世界観レベルのものであったことを考えるなら、事は現代においてもなお単純な実体化の批判だけでは済まされないと考えられる。「意識」という現前の存在根拠に関わる問題である。

註 カントからの引用はアカデミー版全集により、括弧内に巻数と頁数を略記する。

Kant's gesammelte Schriften. Herausgegeben von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften.

『純粋理性批判』の引用は慣例に従い括弧内に A 版 B 版の頁数を掲げる。

- 1 拙稿：、「ヘーゲルの「法哲学」 —— その成立の背景 —— 」(11)「ライプニッツの力学」、『横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅲ』、第 20 集 p 24-45、2018
- 2 確認するまでもないが、「活力 vis viva 」と同義である。Vgl. Leibniz. De Primae Philosophiae emendation et de motione substantiae. (Die Philosophischen Schriften. IV469)
- 3 拙稿：「ヘーゲルの「法哲学」 —— その成立の背景 —— 」(10)「ライプニッツ、カントの力の概念」、『横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅲ』、第 19 集 p 26-52、2017
- 4 『自然哲学の形而上学的原理』(1786)については、さしあたり、前掲拙稿 2017「ライプニッツ、カントの力の概念」第二節で考察しておいた。
- 5 念のために述べておけば、アリストテレスの「デュナーミス (潜勢態・可能態) - エネルゲイア・エンテレケイア (顕現態・完成態) 概念は、常識的 (因果論的) な「可能 (原因) - 現実 (結果)」概念とは異質である。アリストテレスにおいて、例えば現実態としての「聴こえている音」の、可能態・潜勢態は「楽器」であり「聴覚能力」である。Vgl. De Anima 425b~.
- 6 『純粋理性批判』「経験の類推」「第二類推」が想起されるが —— 「〔多様の知覚を〕把捉すること、すなわち構想力の綜合作用へとり入れること」は「常に継起的である」(A189=B234) —— 『活力測定考』においても、後述するように、「実体」の系列が「同時共存的」と「継起的」とに区別され、「実体」の「力」の本質から、「運動」が生じるのは「継起」的系列関係においてである、とされている点は、(発展史的にも)留意されてよいであろう。
- 7 『純粋理性批判』アンチノミー (A405=B432~) を想起。ライプニッツに倣って「形而上学的」に世界=全体を考える際には矛盾は生じないが (Falkenburg.2000,s.143)、有限な「感覚」によ

り「現象」の全体を捉えようとするところにアンチノミーが生じるとカントは考える。「形而上学」的な世界＝物自体（「叡智界」『可想界と可感界の形式と原理』1770）の本質である「運動」「変化」は、有限な「感覚」に「現象」する限りで「静止」として現れる（「理性の仮象」）。1772年頃の手稿（Refl.4525）でカントは、「現象における絶対的全体とは、一つの矛盾である」と記している（XVII. 582）。Vgl. Falkenburg, Brigitte (2000). *Kants Kosmologie: Die wissenschaftliche Revolution der Naturphilosophie im 18. Jahrhundert*, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann.

⁸ カントのここ —— 最初期の『活力測定考』 —— での新たな「物理的影響」説の提起が、「心身問題」に関わっているものであることの確認は、カントの思想展開の意識が当初から、デカルトの心身二元論に始まってライプニッツの予定調和説に及ぶ大陸合理論の系譜に棹差しつつ、当時の講壇哲学において争われていた、心身問題、自由論を巡る論争を明確に意識しつつ後の批判哲学をも遠望する野心的なものであったことを窺わせるに十分なものであったことを裏付ける。ライプニッツによってデカルト二元論のアポリアを打開すべく提起された「予定調和」説を、ヴォルフは心身間の平行関係を説明する仮説に限定し、モナドには表象力を認めず物理的実体 —— 所謂「自然モナド」（本論第三節参照） —— としていた（『ドイツ語形而上学 § 767』）。それに反対して物理的モナドに改めて表象力を回復してヴォルフの物理的影響説を拡張し、世界全体における実体相互の関係を「心身」関係も含めて説明し直そうとしていたのがカントの師クヌッツェンである。問題は人間の主体的自由を物理的世界の法則的必然性を「蓋然的」なものとしてでも人間主体の「自由の根源的活動」を認めるか（クルージウス）、或いは世界の法則的必然性をあくまで完全なものとしつつ且つ人間の自由な「決定根拠」を認めるか、のいずれかであった。カントがとったのは後者の道である。本稿の立場からの一連の経緯を巡る解明は、カント『形而上学的認識の第一原理を巡る新解明』（1755）の読解をもとに別稿を期したいが、さしあたり山本道雄『カントとその時代 改訂増補版』（2010 晃陽書房）、該截には同著者による岩波版『カント全集』第二巻「形而上学的認識の第一原理」記者解説 502 頁以下参照。

⁹ 後論、第三節（95 頁）参照。

¹⁰ 「前批判期」の自然哲学的・科学的論考群が、批判哲学の思想形成に重要な寄与を果たしたとする研究は近年趨勢となりつつあるが、上記 Falkenburg の他に、さしあたり、H.Hoppe. *Kants Theorie der Physik*. Frankfurt a.M. 1969, H.-J.Waschkies, *Physik und Physikotheologie des jungen Kant*. Die Vorgeschichte seiner Allgemeinen Naturgeschichte und Theorie des Himmels, 1987, M.Friedman. *Kant and the Exact Sciences*, Harvard UP 1992, K.Pollok. *Kants Metaphysische Anfangsgründe der Naturwissenschaft* 《. Ein kritischer Kommentar. Kant Forschungen Bd 13. Felix Meiner 2001. S.Lorenz, Artikel: Physikotheologie, in *Historisches Wörterbuch der Philosophie*, Bd.7, 1987. 前掲山本道雄『カントとその時代』 —— ライプニッツ・ヴォルフ学派と称されてきたヴォルフ哲学の実際については、同著者の『ドイツ啓蒙哲学者クリスチアン・ヴォルフのハレ追放顛末記』（2016 創文社）も参考になる。犬竹正幸『カントの批判哲学と自然科学』（2011 創文社）。カントの「アприオリ」概念の成立を探求し、アприオリな経験的諸法則の制約としての「超越論的アприオリ」の位相を提起して、経験的時間空間とユークリッド空間との関係についても論じている、山根雄一郎『〈根源的獲得〉の哲学 カント批判哲学への新視角』（2005 東大出版会）も参照。Vgl. W.Bröcker. *Kant über Metaphysik und Erfahrung*. Frankfurt a.M. V.Klostermann. 1970.

¹¹ カントは『新解明』論文（1755）で、ライプニッツの「充足理由律」の概念を「決定根拠率」と改名するクルージウスに賛成して、自らその名称を改めているが、その理由がまさに「意識」の問題であったことは、ここでの「実体」概念の、「意識」と「物質」との区別を排した再検討に関連して、銘記されておいてよいだろう。『新解明』論文「第二章 決定根拠律、通俗的には充足根拠律について」（I 391～）参照。クルージウスとカント哲学の関係については、山本道夫「なぜカントはクルージウスを理解できなかったか」（前掲書 2011 所収「第十論文」252 頁以下）参照。

¹² 後に時代に先駆けたカントーラプラス説として著名になる『天界の一般自然史とその理論』（1755 脱稿）の銀河系生成論は、如上の物質の本性としてのライプニッツ的「内在力」の具体的展開として初めて構想され得たのであることは言を俟たない。例えば、第二部「自然の最初の状態、天体の形成、そして天体の運動並びにこの運動の体系的関係の原因を、特に惑星系に関して論じ、更に創造の全体に対しても論じる」第一章「惑星宇宙一般の起源とその運動の原因について」では、「宇

宙「惑星系」の起源について、物質に内在する「引力 - 斥力」を原理とする、次のような説明がされている。「要素が遍く同種であれば、分散した要素は静止するであろうが、しかし要素が異種であることによってこの静止状態は破られ、カオスはより強い引力を持った粒子があるところで自己形成を始める」「諸要素は相互運動を惹き起こす本質的な力を持っていて、それ自体で生命の源泉である。物質は即座に自己形成しようと努力する。分散した要素のうち、比較的大きなものは引力によって、自分のまわりの領域からより比重の小さいあらゆる物質を集める」「…自然の中にはもっと別の力が蓄えられている。それは、物質が粒子に解体される場合にとくに現われてくるもので、この力によって粒子は互いに反発しあい、そしてそれが引力と相争うことによって、いわば自然の持続的生命ともいうべき運動を生み出す」「この斥力によって、引力点へ向かって落下する要素は直線運動から相互に入り乱れて側方へ方向を変え、垂直の落下運動は、落下の中心点を含む円運動になる」「もしきわめて大きな空間の中の一つの点にある要素が、その引力を他のどこよりも強く自分のまわりに働かせるとすれば、この範囲の全てに広がった要素的粒子の現素材はこの要素に向かって落下するだろう。この全般的落下によってまず最初に、この引力の中心点に一個の物体が形成される。この物体はいわば無限に小さい胚から急速に成長するが、然しその質量が増大するにつれてますます強い力で周囲の部分動かして自分に合体させる。この中心物体の質量が非常に増大すると、かなり離れた粒子がこの物体に引き付けられる際の速力は、これらの粒子を互いに反発させる弱い斥力によって側方へ曲げられて、側面運動になる。これらの側面運動が遠心力によって中心物体を一つの円の中に含むようになるとき、粒子の巨大な渦巻きが生じる」(I 264f.)

付言すれば、カントが「経験」的科學に対して「形而上学」が不可欠と考える理由は、ニュートンが天体の回轉運動の二つの要素のうちの一つである「直進力」の起源を「神の直接の手」に求めたからである。「単純な基本法則では解明できない複雑な性質になると探求の努力を断念し、神の直接の意志を引き合いに出して満足すると言うのでは、哲学者にとっては悲しむべき決心である」(I 261)

¹³ 『形而上学的認識の第一原理についての新解明』いわゆる『新解明』論文(1755)は、前書きに続けて「第一章 矛盾律について」「第二章 決定根拠律、通俗的には充足理由律について」「第三章 決定根拠律から得られる、帰結においてきわめて豊かな形而上学的認識のための二つの原理が叙述される」という構成を持ち、ライプニッツ・ヴォルフ学派の根本原理「矛盾律」「充足理由律」を批判し訣別したものとして受け取られてきているが——カント自身『純粹理性批判』「第二類推論」で、充足根拠律に関わる従来の証明論を「徒勞」と記し(B264)、前批判期に対する非湖畔の意味をも込めているとされてきた(山本道雄『カント全集2』「新解明論文解説」505頁)——同論文でのカントの主張の核心は、「行為」に「決定根拠」を認めることであり、本稿の主張である「内在力」の「現象」としての「意識」の「経験」世界における「運動」を「行為」と考えるとき、経験的偶然的な法則決定の選択を理性主体が、先ずは「自由」に行い得ると見るところにあると思われる——そうであるからこそその「自由」の下で、主観的経験のうちに客観的真理がなぜアприオリに現象することができるのか、という問題も出来し得るのである——。『新解明』論文については、冒頭第一章のライプニッツ・ヴォルフ派が主張してきた矛盾律原理に対するカントの批判的議論を巡っても——カントは肯定-否定の判断対は「経験」世界におけるものとして等価と考えたと言うことができる。その限り、ライプニッツが主張した根本原理としての矛盾律は「形而上学」的原理とみなされることになる——別稿を期したい。さしあたって、カントの「無限判断」が「肯定-否定」判断とは異質のものであり、その前提として「物自体」界を構成し、ヘーゲル弁証法論理(「概念」)の論理構制に通じるものであるとの見通しを述べている、石川求『カントと無限判断の世界』(2018 法政大学出版局)参照。

¹⁴ ライプニッツの「連続律」については、前掲拙稿 2018 参照。

¹⁵ 全集訳文では、[Ⅲ、Ⅳ]としているが、続く記述「そこで次に、モノイドを物体の無限小の粒子と見做すものが内容に用心する」が「命題Ⅳ」である。

¹⁶ 「心」が決して他と重なることのない、それ固有の「位置」を物理的空間内に持つ、とする主張はカントが一貫して主張してきたものである。有名なスウェーデンボリの「透視」事件にカントが関心を示したのもそのロジックから——「自己の心は、他人の心と同一空間を占めることができるか」——であり(『視礼者の夢』(1776)Ⅱ 320~)、カントはそこでも、批判的論証——「心」は他と決して重なることのないそれ固有の位置を持つ——を繰り返してみせている。